
澄んだ青

深尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

澄んだ青

【Nコード】

N0015K

【作者名】

深尋

【あらすじ】

八重は、自分の中にある『関心』を全部捨てた。

そして毎日空を見て、何とも思ふこと無しに過ごし始める。

『隣の席の人』の巨大な天使の美しい寝顔や、

『後ろの席の人』の流れ星のような言葉が、

すっからかんだった八重の『関心』という世界に色を与え始めた。

脱力系青いお話。

僕から無くなった。(前書き)

ただの脱力感。

というより虚脱感。

だから字数もちよつと少ない。

だから色々想像してください。

想像力で埋め合わせてください。

僕から無くなった。

澄んだ青。

遠くに見つめる空。

美しく清い。

混ざる空気。

迫り来る漆黒。

そして夜の輝き。

星よ。

『どうか空を食べないで。』

世界はとても大きなモノ。

比べてわたしは、とても小さいモノ。

馬鹿みたいなことで笑い泣きし。

くだらないことに怒り安堵する。

ころころと転がる人格に呆れた。

とてもとても、疲れてしまった。

だからやめようと思う。

こつやって、喜怒哀楽を持って過ごすのを。

好きな人はもう『好き』じゃない。

嫌いだった人はもう『嫌い』じゃない。

普通だった人は引き続き『普通』。

勿論好きだった男の子も好きじゃなくする。

親友や、友達や、そういう細かい区別を取り払う。

くだらない種類分けなんて、もううんざり。

簡単だった。

好きな男の子『だった』人は、本当はそれほど好きでもなかったってことだ。

だってすぐに好きじゃなくなったもの。

親友『だった』人は、すぐに他と満遍なく対応出来たし。すぐく、簡単だった。

だから今日も、教室の話し声を聞きながら空を見ている。今日も灰色の空。

雲に覆われてとても腫れぼったいように見える。

ぼとんぼとん、と雲が落ちて来そうなほどだ。

楽しいわけじゃない。

けれど飽きることはなかった。

「ああ・・・なあ、俺のノート返して。」

隣の席の人が帰って来た。

がたんと椅子を乱暴に引いて、これまた乱暴に腰を下ろす。

「あーつごめん、ノート借りてたね。すぐ返します。」

わたしに言っていることは分かってたので、

すぐにそれっぽいセリフを返す。

ノートを机から出す。青い罫線の可愛らしいノートだった。

「はいどうも。」

短く放つと、すぐに机に突っ伏してしまった。

なんだか綺麗な寝顔だ。

背が高く細っこい隣の人は、しかし巨大でも美しく見えた。

天使みたいだった。

そもそも天使って言うのは女性でなく男性の形をしたモノだから、案外こういう外面してるのかもしれない。

そんなこと考えながら、再び窓の外空へと視線をやった。

窓で切り取られた、四角な空は灰色だった。

仲良く。

今日の空は灰色。

燃えた後の色。

昨日の空は青色。

空虚知らずの甘い色。

明日の空はどんな色？

甘い甘い、虹色が良い？

君はどんな、色が良い？

今日も空を見ている。

今日も隣は眠ってる。

今日も心がだるい。

今日も隣は天使。

マツゲが長かった。

男の子ってこんな長いモンかな、と思った。

すこしだけ捲くれた袖から見える手首が細い。

でもソレにくつついた手のひらはとても大きい。

面白いモンだなあ、と魅入ってしまう。

私は自分が思ってる以上に隣の人の寝顔が好きだった。

なんだかとても楽しかった。

とはいえ、今日もその程度の生活だ。

他の子ほどこやーきやーしてないし、笑うこともない。

ひまだけど、ひまではないのだ。

最近は見えるモノが増えたし。

空と、風の質感と、隣の人の天使の寝顔。

十分だった。

すぐに放課後がやって来る。

カバンに色々と詰め込んだ。

他の子はすぐに用意を済ませ、すぐに教室から出て行った。

他のクラスの友達が待ってるから早く行こうってな具合だろう、大半が。

つい前までは私にもそんなことがあった。

待ってるから急ごうとか思ってた。

今では待っても特に急ごうとは思えなくなった。

何て傲慢な女！
（こっまん）

と自分でも思うし、周りも思うかもしれない。

だが、傲慢でも良い、ゆっくりと詰め込んだ。

「なあ、隣の人。」

私からも隣の人が不意に話しかけてきた。

「はい。何？」

「思うんだけど、俺、いつつも寝てるけどさ。誰か見てる？」

あー、やっぱり感じ取るモノかなあ。

ただ、それだけ彼の寝顔は価値有るモノなのだ。

美しい寝顔の主が、私をじっと見つめた。

うーん、どうしようかなあ、と迷った。

久しぶりにこんな風に悩んだ気がする。私もちやんと人間なのだ。

それもちよっただけ嬉しく感じられた。

「ああ、うん。私見てる。はは、ごめんなんか、変態みたい。」

正直に言ってみることにした。

ここでうへえ気持ち悪う、とか思われても良いから。

だってどうせ、天使が居なかった時と同じに戻るだけなのだから。

隣の人の表情をちらりと伺ってみた。

「ええ、あんたが見てたん？そうそう、視線感じてたんだよなあ。そっか、あんたかあ。」

にこにこ笑っていた。

この人もどうやら、そうとう変な人らしかった。

だが天使の寝顔の主はやはり、ソレ相応の笑顔で笑う。

「あ、でもすごい綺麗な顔してるよ。うん、だから見てる。」

「そうかあ、俺綺麗かあ。いや、ちょっと照れるかも。」

「天使みたい。」

思ったことを口に出す。

彼はさらに照れて笑う。

「天使つて。俺そんな無垢に見える？」

「見える見える。」

「いやあ、ね。俺の隣の人ってさ、すごい俺と似てる人だと思うたんだよね。」

意味、分かる？と彼が問う。

「分かるよ。何に対しても、適当に笑ってる人、ってことでしょ？」
彼は満足そうに笑う。どうやらアタリ。

「そう。もつと言うと、あんたの場合、無関心から成り立っている仮面、かな。」

ノート貸した時も返す時も、何か作り物の返答と顔するなあつて。だからちよつと気になってた。」

天使くんになるなんて言われると、『無関心から成り立つ仮面』とやらにも、

何やら沁みるモノがある。

「似てるの？天使くんと私が。うん、似ては無いと思うんだけど。」
「うは、天使くんって！矢原やはらですよ、ノゾキ魔？」

「私だつて、岩井だし。」

「いやいや岩井、俺ら似てるよ。案外、似てる。」

矢原くんが力を入れて言った。

強く諭されている気持ちになる。

そして彼は、だからさ、と付け加えた。柔らかに笑っていた。

「これから、ちよつとだけで良いから、仲良くしない？」

普段であれば。

こんな話、興味無いのだけど。

理由は天使くんだからだった。

私は一応、久し振りにちゃんと笑いながら頷いた。

彼はずつとニコニコしてて、いつもの無表情を見せなかった。

ああそうか。ふと思う。

彼と私は、互いが思うより結構深く繋がりを持つてるんだ。

だからここに居て笑いかける彼。

なんだか酷く可笑しな話に思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0015k/>

澄んだ青

2010年10月17日03時11分発行